

情報活用の実践力を育成する取組

－国語科授業における工夫改善について－

かつらぎ町立三谷小学校

教諭 井 上 茂

1 研究のねらい

私たちは、収集した情報の中から日々生活の目的に沿った選択をし、それを活用している。近年、インターネットの普及や社会の情報化の進展は著しい。情報伝達手段が豊富になり、扱うことのできる情報量が著しく増加する一方、様々な問題も指摘されている。その中で、子ども自らが必要な情報を集めたり、選んだり、適切に活用する力を育成することの重要性が増してきている。

児童が主体的に生きていくための「情報活用能力」は、これまでの「読み、書き、算」と同様に必要な力となる。このことは、「生きる力」の一つである「情報活用能力」の育成を目指している情報教育においては、児童の発達に応じて系統的に展開していくことの重要性を示している。

『情報教育の実践と学校の情報化～新「情報教育に関する手引」～』（文部科学省、平成14年6月）では、小学校段階での情報教育は、『各教科間の関連を図った取組が行われやすいという特色を生かし、各教科等の具体的、体験的活動の中で「情報活用の実践力」の育成を図ることを基本とし、子どもたちが情報手段に慣れ親しみ、適切に活用する学習活動を充実すること（※1）』としている。

そこで、情報活用の実践力の育成を図ることをねらいとし、様々な情報機器の活用やそれに応じた学習形態の工夫について研究を深めることとした。

2 研究仮説

(1) 研究の構想

情報活用の実践力は、国語科をはじめ各教科や総合的な学習の時間の中で育まれる伝え合う力と深く結びついているといえる。図1に示すように、子どもたちが目的意識をもって、様々な学習活動の中で「調べて・まとめて・伝える」という学習のサイクルを繰り返すことで各教科等の目標や情報教育の目標を達成することができる。

伝え合うことに関して桜美林大学の平田オリザ助教授は、著書や論評で「対話」という視座から、「説明する能力や相手の価値観を認める能力を培うことが、人とのかわり方や人間としての成長につながる」と述べている。

この主張は、情報教育でつきたい力のみならず国語科を中心として伸ばしたい伝え合う力についての重要な点を示唆しているものである。

子どもたちが自ら目的意識を持って取り組めるような学習活動を設定し、「調べて・まとめて・伝える」という学習サイクルを繰り返し体験することで「生きる力」が育まれる。

同時に、学び方のスキル（上手に調べるコツ、まとめ方の工夫、相手に伝える時のポイントなど）を体験的に習得させるとともに、ITやメディアの活用とその特性を知ることに関わりつづけることも可能となる。

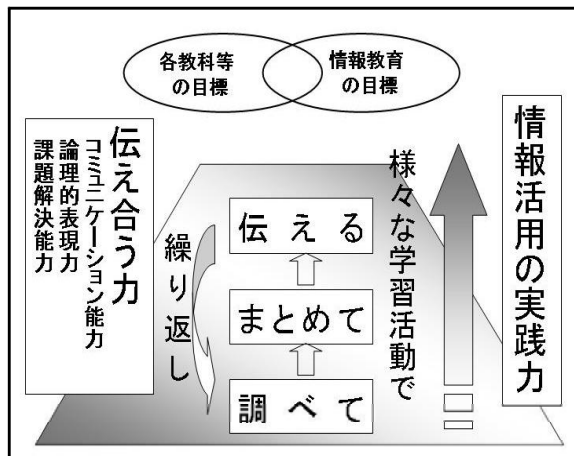


図1 情報活用の実践力と伝え合う力

(2) 研究の仮説

ア 研究の仮説

小学校国語科「標識づくり」単元の学習において、標識について調べたことや考えたこと、自分で考案した標識について説明し、報告する学習活動を通して、伝え合う力と情報活用の実践力を高めることをねらいとし、以下の仮説を設定した。

自分で標識を作り、発表会で紹介し合う学習活動の中で、情報機器の特性であるやり直しや修正が容易にできる機能を活用することにより、発想や構想を表現に生かすことができ、意欲の喚起と持続を促し、伝え合う力と情報活用の実践力が高まる。

イ 検証方法

児童の観察及びワークシート・作業メモ・作品・授業後の感想文の分析で行う。発表の様子や記入の内容について、単元目標や情報教育の目標に基づき学習態度の観察やワークシートの考察により確認する。

(3) 情報機器を活用した学習について

学習指導要領では、基礎・基本を確実に身に付けさせ、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を育成することを基本的なねらいとしている。このねらいの実現のためには、知識や技能だけでなく、「学ぶ意欲」や「思考力、判断力、表現力」、さらには、「情報活用能力」などを含めた「確かな学力」を育むことが重要であり、大きな課題である。

文部科学省では、充実した教育活動を行うために、平成14年8月、ITをどう活用すべきかという観点のもとに検討を行い、「ITで築く確かな学力～その実現と定着のための視点と方策～」を提示した。この報告では、教科の目標を達成し、「確かな学力」の向上を図る視点から、具体的な活用事例が系統立てて提示されている。

授業におけるIT活用の有効な方法の一つとして、課題についての視覚イメージ情報の提示を挙げたい。視覚イメージ情報として、図表やイラスト、写真や動画、シミュレーションなどがある。人間は、その課題に関することばの情報とイメージの情報の相乗効果によって、より理解が深まる。学習課題や子どもの状況に応じた視覚イメージ情報を提示することが、「わかる授業」の実現に有効である。具体例として、学習プリントの作成、教材の大画面提示、直接体験が不可能な事象への対応、調べ学習での活用などが挙げられる。また、図2に示した大画面提示装置のもたらす効果についても検証することとする。

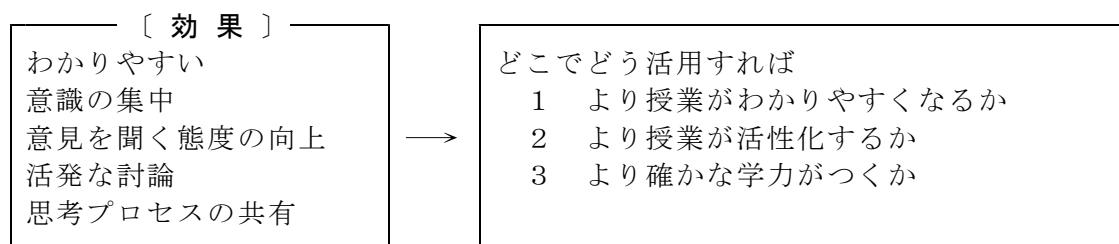


図2 大画面提示装置のもたらす効果

3 研究の内容と方法

(1) 検証授業について

上記の研究仮説に基づき、所属校における検証授業を通して研究を行うこととした。子どもたちが自ら調べ、分かったことや考えたことをまとめ、それを他者に伝える活動を通して情報活用の実践力を育てることを目指した。

(2) 検証授業の構想

- ア 対 象 かつらぎ町立三谷小学校 第3学年 男子5名 女子4名 計9名
イ 単元名 「標識づくり」
ウ 指導にあたって

子どもたちは、1・2年生では生活科、2年生からは算数科・国語科、3年生からではさらに総合的な学習の時間・学級活動などでコンピュータを利用してきた。ゲーム、お絵かき、簡単な文づくりやインターネットでの検索などの学習経験がある。また、昼休憩には各学年の児童が曜日を決めてパソコンを自由に使用できる環境である。パソコンを利用した授業では、「もっと使いたい」と意欲を見せる子どもが多くみられた。

生活科や国語科では、調べたことや学習したことを文にまとめたり図や絵に表したりして、みんなに伝えるという学習を多く取り入れることで、子どもたちは興味を持って取り組んできた。そこで、コンピュータや情報機器を活用することによって、より充実した学習活動を重ねることが、「情報活用の実践力」の育成につながると考える。

本単元は、次の2つの学習で構成される。

- ・説明文教材「標識と言葉」を読み、文章構成を踏まえて内容を的確に読み取る学習。
- ・読み取ったことを生かして標識（絵文字）を作り、それを相手に分かりやすく伝える学習。

教材文「標識と言葉」は、現在の日常生活に浸透している標識を取り上げており、3年生の子どもたちの興味や関心をひく。また、総合的な学習の時間や図工科、社会科などとの関連も深く、広がりをもった学習ができる教材である。標識についての説明と、日本でたくさん使われるようになった理由を分かりやすく述べている。また、文章構成がまとまっていて、写真も豊富である。

さらに、教材文から読み取ったことや集めた標識を活用して標識（絵文字）を作るという表現活動を設定し、伝える相手や目的を意識した学習活動を行うことができる。

エ 単元目標

- ・標識と言葉に興味を持ち、文章から大事なことを正確に読み取り、身の回りの標識について考えることができる。
- ・「標識づくり」に関心を持ち、自分らしい作品を作ろうと意欲的に学習に取り組むことができる。
- ・ペイントソフトの機能を生かし、表現を豊かにすることができる。
- ・集めた標識や作った標識について意欲的に発表したり、友だちの発表に関心を持って聞いたりすることができる。

オ 情報教育の目標との関連

みんなに伝えたい標識を調べ、作り、伝える活動を通して、「情報を取捨選択する」「まとめたことを相手にわかりやすく伝えようとする」「コンピュータや情報機器を効果的に活用して表現しようとする」といった目標を目指しながら、「情報活用の実践力」を育む。

カ 学習指導計画〔全7時間〕

第1次 教材文「標識と言葉」を学習する（1時間）

時	学 習 活 動	形態	支援・指導上の留意点	評価規準
1	・「伝える」ために、どんな方法があるかについて話し合う。	一斉	・言葉の他に音・絵・記号など幅広い視点から考えさせる。	・自分の経験をもとにして意欲的に発表している。〈話す・聞く〉 〈関心・意欲・態度〉

・ 標識について知っていることを話し合う。 ・ 教材文を読んで内容をつかむ。 ・ 暮らしの中で使われている標識を集める。 (並行して課外で行う)	一斉 一斉	・ 標識について、いろいろな意見が出るようにする。 ・ それぞれの標識の意味について理解できるようにする。 ・ 標識の観点について紹介し意欲を高める。	・ それぞれの標識の目的や工夫を正しくとらえている。〈読む〉
--	---------------------	---	--

第2次 いろいろな標識を調べ発表する（2時間）

時	学 習 活 動	形態	支援・指導上の留意点	評価規準
1	・ 標識集めをし、標識の意味や特長を文にまとめる。 〔ワークシート〕	一斉 個別	・ 集める観点について整理し、意味や特長などについて個別に助言をする。	・ 標識の意味や特長、工夫を正しくとらえてまとめている。 〈書く〉
2	・ 集めた標識について発表し、意見交流を行う。 〈一人ずつ発表する〉 〈友だちの発表を聞く〉	一斉	・ 聞き手にわかりやすい発表の仕方について説明する。	・ 自分が集めた標識について大事な言葉や文を落とさずに、聞き手を意識して話している。〈話す・聞く〉 ・ 友だちの発表の話し方や伝え方について感想を持ちアドバイスしている。 〈話す・聞く〉

第3次 自分で標識を作る（3時間）

時	学 習 活 動	形態	支援・指導上の留意点	評価規準
1 2	・ 標識づくりの構想を練り、ペイントソフトで作成する。 (標識・説明文) ・ 印刷した標識の説明文を考え、発表の練習をする。	一斉 個別	・ 工夫して自分らしい表現ができるように助言する。 ・ 紙に下書きするなど自由な方法を選ばせる。	・ ペイントソフトの効果的な機能を知り、作品作りに活用しようとしている。 〈関心・意欲・態度〉
3	〈小グループで練習〉	個別	・ 標識の意味、使う場所、作った理由、工夫したところをわかりやすく説明する文を書く。 ・ 聞き手にわかりやすい発表の仕方について助言する。	・ メモを生かし、意味や場所、理由、工夫をもらさず書けている。 〈書く〉 ・ 発表のポイントについて感想を持ち、相手の立場に立ってアドバイスしている。 〈話す・聞く〉

第4次 発表会で紹介し合う（1時間）

時	学 習 活 動	形態	支援・指導上の留意点	評価規準
1	・ 自分で考えた標識を発表し、意見交流を行う。	一斉	・ 聞き手にわかりやすい作品提示の方法や話し方について	・ 自分で考えた標識について大事な言葉や

<一人ずつ発表する> <友だちの発表を聞く>		て説明する。	文を落とさずに、聞き手を意識して話している。 <話す・聞く>
・学習をふりかえり、感想を書く。	個別		・友だちの発表の中から複数のポイントについて感想を記入している。 <話す・聞く>

・使用する機器：児童用コンピュータ、教師用コンピュータ、液晶プロジェクター(プラズマテレビ)

4 検証授業の分析と考察

(1) 「調べて・まとめて・伝える」ことに関して

右の写真1は、パソコンコーナーでインターネットなどを使って標識調べをしている様子である。

学習課題を自らのものとするために、まず学習テーマを提示し、子どもが持っている興味、関心、疑問などを出し合って、学習することを焦点化する。次に、見学や聞き取りなどの体験的な活動、書籍やインターネットでの調べ学習などを通じて自らの課題をつかませる。そして、子ども一人ひとりの状況を踏まえ、課題追求へと進むことを支援することが大切である。



写真1 パソコンコーナー

今回の学習は、「伝える」ということをテーマに、町で見かける標識を集めたり調べたりして、伝え合うための工夫について考え、最後に、学校生活でこの場所にこんな標識があればいいと思うものを考え、色や形などを工夫して作ってみようという内容である。

第1次では、標識について知っていることを話し合った。子どもたちはお互いの発言から、身の回りには見過ごしている標識や絵文字が多くあることに気づき、標識集めについての関心が高まった。

第2次では、標識を集め、意味や特長をまとめ、図3に示すワークシートをもとに発表した。禁止標識や道路標識など特定の標識ばかりに偏りがちであったが、友だちの集めた標識を見ることで様々な標識や絵文字にふれることができた。また、多様な標識を知ることが標識作りの発想を豊かにすることにつながったことが発表後の感想から分かった。



写真2 標識集めの発表

〈標識集め例〉	〈標識集め発表例〉
・ゆうびんきょく ・でんわ ・男子トイレ ・女子トイレ ・ちゅう車きんし ・車つこうきんし ・レストラン ・一時停止 ・病院	・とまれ ・初心運転者 ・ちゅう車場 ・エスカレーター ・自作の標識 ・ガソリンスタンド ・たばこきんし ・ひじょう口 ・トイレ

標識集め

三年(一)

自筆の力で作った標識の集り

スローペースで進む

場所：ちゅう車場

意味：ちゅう車を止める

標識集め

三年(一)

ガソリンの集り

場所：ガソリンスタンド

意味：ガソリンを給油する

図3 標識集め

＜「標識集め」の発表後の感想＞

- ・ さいしょはいみふめいでした。でも、どんどんわかってきました。8まい書きました。車でドライブしながら、さがしました。とてもいいペンきょうだとおもいました。ドライブは30分かかりました。ペンきょうは、いまとてもおもしろいです。(中略)先生がきてくれてよくわかったし、いみもよくわかります。
 - ・ 文字がなくても色や形から、どんな意味のひょうしきかわかるんだなあとと思いました。
 - ・ 色やかたちで、きけん、あんしんをひょうしきであらわしてあるとはしらなかったからペンきょうになった。
 - ・ ひょうしきあつめをやって色や形がちがうって、きょうわかりました。ひょうしきが大きくてわかりやすいし、ちゅう車場のひょうしきは、はじめて見てペンきょうした時わかった。
 - ・ 調べてみると、いがいに楽しくて10枚も書いていました。次は、自分で標識を作るんですが、ぼくは頭の中でたくさんの標識を次々と思いつきます。早く、明日になって頭にうかびついた標識をたくさん書きたいです。
- そして、色々なやくにたつ標識をつくりたいです。

第3・4次では、身の回りで生活に役立つ標識を作り発表した。調べたことをまとめた経験をもとに創作することは、期待に胸ふくらむ活動である。しかし、課題意識を明確に持つことができていない段階の子どもも存在する。子ども一人ひとりの状況に応じた支援をし、作品作りを行った。

今回、児童用統合ソフトのペイント機能を使って標識を作った。デジタル化されたデータは加工、修正が容易であるので、今回の標識作りのようなデザイン作成などでは特にペイントソフトの活用は有益であると考え。その中で特徴的な点をあげる。

〔児童の様子〕

- ・ A児
普段、集中力を持続することが難しいときがあるが、思いついたアイデアを画面上に素早く表示することで作品を完成させる意欲が持続できた。
- ・ B児
普段、作品制作に時間を要するが、形をとること、彩色などが瞬く間にできるので満足しながらも制作時間が短縮できた。
- ・ C児
作業の時、苦手意識があり途中で集中力が落ちることもあったが、思い通りの配色ができないときでも色を変えることが素早くでき、集中力が持続できた。

〔全体〕

- ・ 描画機能、塗りつぶし、取り消しや消しゴムなどの機能を有効に使うことで、より構想に近い効果を得ることができ、自分の思い描いた作品作りにつなげることができた。
- ・ 線の太さの調節や配色についての試行錯誤が容易であり、主となるものと背景との色の対比を繰り返し試してみることができた。
- ・ 時間の関係で作業の途中でも保存でき、作業再開時に筆記具や絵の具セットなどの準備時間を要さない利点は、紙に直接描く作業では得られない。
- ・ 全体の構図や上下左右の配置などの移動や拡大縮小が容易であり、試行錯誤を繰り返しながら発想を練ることができ、作品完成につなげることができた。
- ・ ペイントソフトの機能に関し、子ども同士でその効果や操作方法について教え合うなどの交流を通じて、高め合いがみられた。自分が体得した操作方法や活用方法を他の子どもに説明することでさらに理解を深めることにつながった。
- ・ 線引き機能での描画だけで作品作りをする子どもには、曲線や円などの機能を使った作品例をあらかじめ印刷しておき、提示するなどの個別の支援を行うことが効果的であった。

- 元になる用紙サイズは事前に準備し教師用サーバー機からLANを通じて写真3に示す児童用コンピュータに送ったので、印刷設定やファイル保存時の各種設定が簡略化できた。

また、レイヤー機能を使い、禁止枠などの下絵を教師が準備することで活用事例の提示など効果的に使用することができた。

- レイヤー機能などの高度な機能については、個々の作品作りの過程や活用事例に応じ個別に援助することが望ましい。



写真3 児童用コンピュータ使用の様子

標識調べの活動や集めた標識の発表を通して、標識についての理解を深め、関心を高めるとともに新たな標識調べや標識作りに意欲をもって取り組むことにつながった。

「調べて・まとめて・伝える」という学習のサイクルを繰り返し体験することが、学び方のスキル（上手に調べるコツ、まとめ方の工夫、相手に伝えるときのポイントなど）を体験的に身に付け、生きる力を育むことにつながることを実感した。

(2) 子どもの学びの様子

A児について

第1次では、標識の持つ意味が十分とらえられていなかったが、第2次で自ら標識集めを行い、集めた標識について発表し合うことや標識の持つ良さをつかむことを通して、さらにいろいろな標識を集める意欲が高まった。第3・4次の標識作りと発表では道路標識に関心をもち、図4に示す同学年の友だちからの「いいところ・アドバイス」カードでの、「わかりやすい」という声に自信を深め、意欲的に取り組むことにつながった。発表したことに対して意見や評価を得ることで、良い点や改良すべき点を知り、次の学習に生かすことができた。

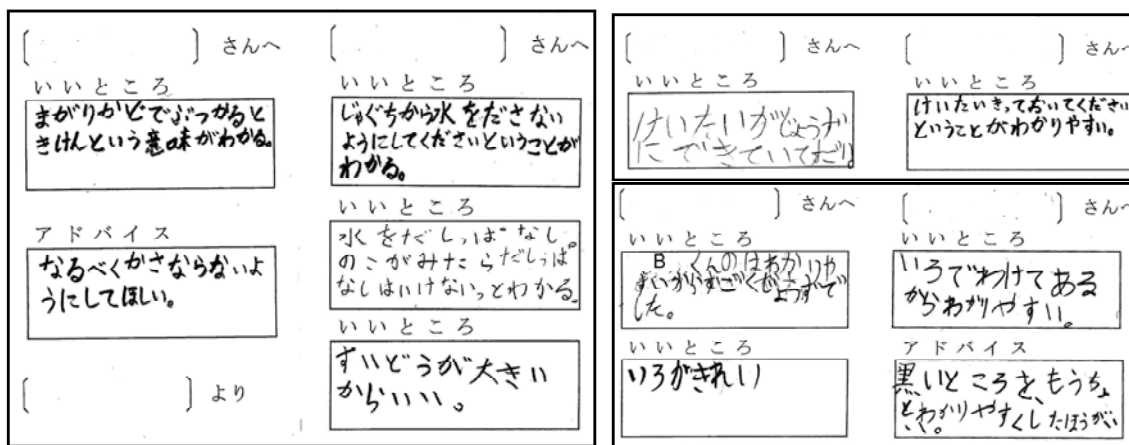


図4 いいところ・アドバイスカード

このような取組を積み重ねることは、情報活用の実践力を高めるとともに、子どもたちが互いを認め、高め合う学習経験となった。

また、大画面提示装置を使うことで、授業導入時における学習の全体像や各時間での学習の課題をつかむことが容易にできた。そして、学習に対しての意識の集中が高まり、友だちの意見を聞いて自分の意見を活発に発言することができた。

C児について

第1次・第2次では、禁止標識に注目し、標識集めでも禁止標識が主であったが、第3次の標識作りでは、学校の生活を楽しくするという観点から標識を考え作ることができた。自らの生活に基づいた自由な発想が作品に表れ、友だちからも高い評価を得て、自信につながった。ペイントソフトで広い面積のべた塗りや円の機能、背景色の組み合わせなどを効果的に使い、満足できる仕上がり of 標識を作ることができ、標識作成の意欲が深まった。

子どもたちが、情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達するという一連の作業が行えるように、小学校中学年段階ではグループで情報機器を活用し、問題解決活動や表現活動において道具として活用する第1段階と位置付けた。

そこで、今回の学習では下書きをもとにペイントソフトを使用して標識作りを行った。実際の活動前に、例となる標識を大画面提示装置で見ることやインターネットなどで調べることを通して、子ども自身が学習場面に応じた情報機器の活用についての経験も深められ、使用の可否も含めた適切な判断の力を付けることができた。子ども一人ひとりに応じた情報機器の活用方法について一定の成果が得られたと考える。

図5は、標識作り発表のワークシートである。作った標識の発表を終えた子どもたちは自信と満足感にあふれていた。大画面提示装置に映った自らの作品を、少しはづかしそうにはあるが胸を張って眺める姿が見られた。作った標識を大画面提示装置に大きく提示しながら発表し、意見を交流することが、伝える相手を意識した発表の経験となった。この学習を終え、子どもたちは標識について調べたことの自信と、自らが作った標識に対して自信と愛着を持つことができ、情報活用の実践力を伸ばすことができたと考える。



〈標識作り案〉

- ・ここでおこってはいけない
- ・出したものはかたづけよう
- ・はしらない
- ・図書室はしずかに
- ・運てん中けいたい きんし
- ・くつのどろをおとそう

〈標識作り発表例〉

- ・けいたい電話きんし
- ・大声きんし
- ・にこにこ
- ・声をださない
- ・かどにちゅうい
- ・水道とめよう
- ・ぶつかったらキケン
- ・マットでふこう
- ・火事は119

写真4 標識作りの発表

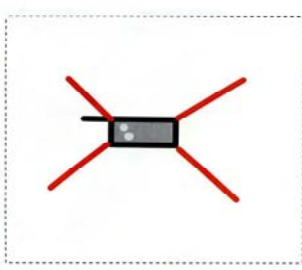
標識作り	標識作り	標識作り
		
意味 三年 () ここでおこってはいけない 場所 図書室 きんし 持ちよう・くふう	意味 三年 () ここはおこってはいけない 場所 きんし 持ちよう・くふう やさしいがたちみやすい色	意味 三年 () ここはみずをたぎらないでくださいという約束です 場所 手をあらうところ 持ちよう・くふう すいどうのふたです

図5 標識作り

＜「標識作り」の発表後の感想＞

＜A児＞

- ・ きょうは、ひょうしき作りのはっぴょうをしました。チームはCさんとBさんとぼくとです。さいしょ言ったのはBさんです。Bくんのは、じがうまい、ていねいな色だしとてもいいかんじとおもいました。

つぎに、ぼくがしました。ぼくはちょっとできたとおもいます。Cくんはいい文しょうだったし、きれいな色だし、とてもいいとおもいます。また、ぼくはていねいにやってきれいな色をぬろうとおもいます。とてもおもしろかったです。またしたいです。

<B児>

- ・ さいしょ、ぼくはパソコンで自分でかんがえたひょうしきを作りました。そして、ぼくが作ったひょうしきは、「大声きん止」です。場所は「図書室」で、とくちょう・くふうは、「本だなの横にはる」です。そして、いよいよ自分が作ったひょうしきをはっぴょうするようになりました。はじめは、少し不あんだったけど、できました。ひょうしき作りは終わったけど、またもう一度ひょうしき作りをしたいです。

<C児>

- ・ I先生とひょうしき集めの勉強しょうをして楽しかったです。I先生とペイントをしたりインターネットでしらべて楽しかったです。にこにこマークがじょうずにできてうれしかったです。

<E児>

- ・ ひょうしき集めは、とてもたのしかったです。だって、インターネットでしらべたり、ペイントで作ったりしてとてもたのしかったです。

<G児>

- ・ ひょうしき集めをした時、どんなひょうしきがあるのかたのしみだった。ひょうしき作りで、初めは思いつかなかったけど、かどを通ったとき、ここあぶないなと思ってかいたら、うまくできてよかった。おもしろかった。

今回、作った標識は校内各所に掲示した。写真5はその例である。それを見て、他学年の児童からの反応も多くあった。約1週間後に4・5・6年生に「いいところ・ひとこと」カード(図6)を書いてもらうことができた。

今後、学習課題に応じて、学年の枠をこえた交流も視野に入れ、情報機器を活用した様々な学習展開を考えることが、情報活用の実践力の育成につながると考える。

〔6〕番さんへ いいところ よく、多く水を出しても子か いるから、これを見ると多水 を出してはいけないことがわ か。 ひとこと とても絵が上手で 見やすいです。 6年 〔 〕より	〔6〕番さんへ いいところ 見やすいようにあて 絵も、わかりやすい。 ひとこと 水の出し、はなは いけなくて、ゆつことわ かりました。 6年 〔 〕より	(4・5・6年生より) ・ けいたいを上手にかいて いる。 ・ 絵も上手でわかりやすか った。 ・ 貼る場所もいいし、意味 もよくわかりました。 ・ 目立つ色だから、目にも よく止まる。 ・ このマークのおかげでじ こがおこらなくなったら すごいね。 ・ おもいついたところがす ごいし、いいね。 ・ こんな標識をつくって くれてありがとう。
〔7〕番さんへ いいところ 走って、いつかるときか多 いから、注意して歩こうと思 います。 ひとこと わかりやすい絵で 書いてると思います。 6年 〔 〕より	〔7〕番さんへ いいところ あつたで、ぶつかったりした 危ないからこのマークはいい と思います。 ひとこと 絵がとても分かりやすくて、 いい。これからよくしてい たいです。 6年 〔 〕より	

図6 「いいところ・ひとこと」カード



写真5 作った標識の校内掲示

5 研究のまとめ

子どもたちの学ぶ意欲の向上は、教師の授業づくりに大いに関わっている。今回取り上げた研究テーマ「情報活用の実践力を育成する取組」一国語科授業における工夫改善について一では、「確かな学力」の向上を目指して取り組んできた。本研究では、国語科の授業において伝え合う力と情報活用の実践力を高めることに寄与できたのではないかと考える。

(1) 成果

- ・ 導入の段階で大画面提示装置を用いることで、視覚的な効果によってより理解が深まり、「意識の集中」や話し合い活動の活発化につながり、子どもたちが「共に学ぶ喜び」を実感することができた。それが、今後の学習意欲を増大させる効果を生んだ。学習の各段階で大画面提示装置を使用することで、子どもたちは自ら気付いたことをあらためて確かめたり、友だちの発表を通じて別な見方に気付くなど、思考面での大きな効果を得ることができた。
- ・ 国語科の「標識づくり」単元に、子どもたちが情報手段に慣れ親しみ、適切に活用する学習活動を充実させる視点を組み入れ計画した。調べたこと、考えたこと、自分で表現したことなどを説明したり報告したりする活動を通して、伝え合う力と情報活用の実践力が高まった。
- ・ ペイントソフトの機能を使い、失敗をおそれず試行錯誤を繰り返しながら作品作りができ、特性を生かした自由な表現が可能となった。
- ・ 児童用ワークシートや作品制作過程において、情報機器を活用し、授業支援に生かすことができた。
- ・ 発表後の感想文などでの自己評価や「ひとこと・アドバイス」カードなどでの相互評価をすることで、子ども自身が学習の成果と課題をつかむことにつながり、次時の学習への見通しや励ましとなり有効であった。

(2) 課題

- ・ コンピュータを用いた学習においては、子どもにとって学習の目的が明確でない場合、ややもすればコンピュータ操作そのものに意識がいつてしまうことがある。基本操作の習熟などの点も含め、子ども一人ひとりへの細かい観察や実態把握とそれに基づく指導が必要である。
- ・ 機器操作の場面において、時間的な制約、機材や技術面での制約を踏まえた上で学習の組立を十分に練ることが必要である。

(3) おわりに

情報活用の実践力は、国語科をはじめ各教科や総合的な学習の時間の中で育まれる伝え合う力と深く結びついている。今回、「標識づくり」の単元の学習において、子どもたちが目的意識を持ち、「調べて・まとめて・伝える」という学習活動を螺旋的、反復的に繰り返すことが、子どもたち一人ひとりの成長につながったと考えられる。

学習の中で様々な情報機器の活用やそれに応じた学習形態の工夫をすることで、子どもたちの学習意欲を高め、より深い学習へとつなげられた。それにより、教師自身の力量を高め、授業研究を重ねることの大切さを再認識した。

普通教室で大画面提示装置を活用した授業は、小学校での各教科等の指導で活用することが期待でき、今後の機器の普及が望まれる。

小学校段階の情報教育では、各教科間の連携を図った取組が行われやすいという特色を最大限に生かし、各教科等での具体的、体験的活動を通して「情報活用の実践力」の育成を図るために、年間計画を含めた学習活動を組み立てることの重要性をこの研究活動を通してあらためて強く認識した。今後、その具体的な実践活動をさらに深めていきたいと考える。

<引用文献>

※1 文部科学省『情報教育の実践と学校の情報化～新「情報教育に関する手引」～』 p2 (2002)

<参考文献>

- ・ 文部省告示『小学校学習指導要領』 国立印刷局 (1998)
- ・ 文部科学省『初等中等教育におけるITの活用の推進に関する検討会議』答申 (2002)
- ・ 大熊徹 寺井正憲編『国語科の授業と評価 3年』 教育出版 (2002)
- ・ 三省堂『国語教室 ことばの学び』第2号 (2003)
- ・ 中川一史『実践的情報教育カイゼン提案』 ジャストシステム出版部 (2004)